

京都市立中京もえぎ幼稚園 「最優秀園実践発表会」 開催レポート

2021年1月26日（火）、2019年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した京都市立中京もえぎ幼稚園の「最優秀園実践発表会」をオンラインにて開催しました。全国の認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・大学、教育委員会等の教育・保育関係者約310名（端末数）の参加がありました。

以下に中京もえぎ幼稚園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：2021年1月26日（火）14:30～17:00
2. 主題：「“ねがい”～科学する心は“ねがい”からはじまる～」
3. プログラム
 - 1) 開会式 14:30～14:40
 - 2) 研究発表 14:40～15:05
 - 3) 指導講評 15:05～15:20
 - 4) 協議会 15:20～16:05
 - 5) 記念講演 16:05～16:55
 - 6) 閉会式 16:55～17:00

研究発表

はじめに

本園では、「科学する心」についての研究を積み重ねており、平成21、28、29、30年度の4度、「優秀園」を受賞した。過去の研究論文と審査講評を読み直していた際に、平成30年度の研究の5歳児では、予想・予測・友達と共に・繰り返し・規則性というキーワードを見出した。また、どの事例でも「科学する心」のもととなる感情があるのではないかと、思い至った。私たちは、その感情を“ねがい”と名付けた。“ねがい”とは、不思議さを感じたり、思いもかけない出来事に出会ったり、思い込みの殻を破る感動体験をしたりする中でおもしろさを感じて、自分が納得いくまで遊びをやり遂げたいという意欲的な気持ちのことである。今回の論文では、子どもたちが様々な事象に出会い心を動かすことで、「実現したい」という“ねがい”をもち、試行錯誤を繰り返し、「科学する心」を育むのではないかと考えた。

研究は、実践事例の考察に加えて、事例を“ねがい”に焦点を当てて、子どもの心の動きや行動、教師の援助、環境構成などを図式化し、その過程を分析した。図式化することで、“ねがい”という目に見えないものを視覚化し、その上で他の事例の図と比較することで共通点や相違点、特徴や育ちの経過を探り、“ねがい”を軸とした考察が深まると考えた。

5歳児

5歳児の船遊びの事例では、坂道で自分の船を滑らせたいという“ねがい”をもち、遊び始めたD児が、自分なりの考えを巡らせたり、友達の声や姿から検証してみたりしながら、自分の船を滑らせようと試行錯誤し物の性質について気づいていった。この事例から、明確な“ねがい”をもつことで試行錯誤につながっていくことや試行錯誤を通して“ねがい”を実現させたいという思いがより強くなっていくことわかった。また、子どもなりの自由な発想から考えを深めていく姿は「科学する心」につながると考え、

正誤を問わず子どもの気づきを受け止める援助が必要だとわかった。

5歳児は遊びが積み重なり、思いが深まっているからこそ強く明確な“ねがい”をもち続けていた。さらに、保育者や友達と共通の“ねがい”をもち、共に試行錯誤することで思考が深まることがわかった。

4歳児

4歳児は、遊びの中で様々に試し、その中から新たな“ねがい”がうまれて、遊びが広がり、様々な試しが思考を深めていくのではないかと考え、泥の感触遊びから広がっていった一連の遊びの事例から検証をしていった。K児は泥で遊びながら、泥や水の感触を全身で味わい、水分量により泥が変化していく土と水の関係性や性質を体感していた。遊びの中で泥の山を触った時に「また感じが変わった」という言葉を発したり、様々な試しをしたりする姿から、変化を予想し、試しながら水と土の関係を確認していることが読み取れた。泥が変化するおもしろさを感じることで様々に試しをする姿につながり、その中で偶然できた丸い形からピザというイメージが生まれ、ピザをつくろうという“ねがい”がうまれた。「こんなものがつくりたい」という“ねがい”から、その実現に向かって工夫することにつながった。4歳児は、遊びを楽しんでいる中で“ねがい”をもち、イメージを豊かに広げることで新たな“ねがい”をもち、試行錯誤しながら楽しんでいることがわかった。

3歳児

3歳児のQ児の事例では、Q児が、様々な試しの中で偶発的に“色が変わる”という気づきにつながったり、繰り返し遊んだりすることを楽しむ姿があった。Q児の思いに保育者が共感することで、さらに満足感を感じて楽しんでいた。その姿から思いのままに様々に試して遊ぶ中で、驚きや不思議さ、面白さなどを感じ、心が動いたことをきっかけに“もう一度やってみたい”という“ねがい”がうまれたと考察した。そして、「繰り返す」という試しが、驚きや面白さ、満足感など心が動いたことをきっかけに起っていると考えた。「繰り返す」ことを通して再現性を確かめ、自分の気づきとして自分の中に取り込んでいくのではないかと考察した。

そして、3歳児では科学的な理解を促すことに重点をおくのではなく、心が動くその瞬間を捉え、子どもの思いや気づきをありのままに受け止める保育者の援助により、満足感を感じたり、意欲が育まれたり、自分の“ねがい”をもつことへとつながっていくと考えた。

まとめ

図式化することで視覚化され、“ねがい”を軸とした考察が深まった。また、他の事例の図と比較することによって、共通点や相違点、特徴や育ちの経過を探ることができた。しかし、微妙な心の動きやニュアンスなどは図では表しにくく、文章で事例を書くことの利点も改めて感じた。

保育者の援助では、教師が仲間として一緒に遊び、目には見えない子どもの“ねがい”を探り、どういう“ねがい”に共感し、引き出したり支えたりしていくことで、子ども自身が“ねがい”を意識して、目的意識をもち続け、思考を深めていくことがわかった。

また環境構成では、たくさんの試しや子ども同士の刺激や関わりがうまれたりしやすいように、位置や距離、広さに配慮したり、イメージに合った道具や材料を継続的に準備したりすることが大事だとわかった。

「科学する心」は、そのもととなる“ねがい”があるから育つことがわかった。つまり、「科学する心」は“ねがい”からはじまる。

協議会

〈協議の視点〉

研究主題

視点① 子どもの“ねがい”～科学する心～を保育の中でどのように捉えているか

視点② “ねがい”をキャッチして豊かな遊びに展開されたご自身の保育実践

ZOOMのブレイクアウトルームを利用してグループに分かれ、上記の2つの視点に沿ってテーマに迫る話し合いを進めた。

園の保育者だけでなく、中学校の元教員や就園前の子どもを担当する保育者、保育研究者など幅広い校種での協議を行うことができた。

それぞれの事例を通して、子どもの試しや素朴な気づき、試行錯誤する姿を丁寧に捉えて、“ねがい”をもち遊ぶ姿や“ねがい”に向かっていく姿を支えていく保育者の援助や環境構成の大切さを再確認することが出来た。保育者の援助では、子どもの気づきや一人一人の考えをありのままに受け止めていくことや自分の考えや思いをのびのびと表現できる保育者や友達との関係の構築が重要であるとの意見があった。環境構成については様々な気づきや試しが生まれるような多様な素材に出会いながらじっくりと遊べる環境や互いの試しから刺激を受け合える環境を整えていくことが大事であると話し合えた。

具体的な事例を参加者同士で語り合うことができたことから、子どもの“ねがい”に焦点を当てるということが、これまでの保育の中でも保育者が大事であると捉え、乳幼児理解を深める一つの視点としていたことが協議を通して感じる事が出来た。

指導講評

古賀松香氏/京都教育大学准教授

「“ねがい”の発見に学ぶ」を演題に、京都教育大学准教授 古賀松香氏に指導講評をしていただいた。本園の教育と本論文について、「研究の継続という価値」「“ねがい”概念の発見という価値」「今後への期待」の3点からお話していただき、研究継続の意義として、日々の子どもの記録をとって保育者同士で語り合うことや保育をひらいて課題をひらく価値を解説された。園で大切にしたい保育理念を言語化し、それを悲喜を共にする同僚性と志を共有し、また実践するというサイクルを繰り返す中で、“ねがい”という新たな概念を発見してきた過程を示していただいた。この“ねがい”という概念は、教育要領でもよく目にする「関心・意欲」と似ているようで同じでなく、子どもの思いを大切にしてきたからこそ出てきたものであることを評価していただいた。“ねがい”は見えづらく言葉では表せないものもあるが、多様な一人一人の“ねがい”がどうあるかを丁寧に見取ることが大切だと教えていただいた。論文事例の中の子どもの“ねがい”にまなざしを向け続ける保育者と“ねがい”続ける子どもの姿から、一人ひとりの育ちにに応じて適時的確な援助を行うことで、多少の困難にも折れずに“ねがい”続け物事にに関わり続けようとする力が育まれていると述べられた。そしてその力は、今後の変動の激しい世の中を生き抜く粘り強さにつながると教えていただいた。

今後も実践研究の意義を発信し続けることへの展望とともに、異年齢の自然な交流が特色であることを指摘していただき、その中でどう“ねがい”が生まれ、育まれているかという新たな研究の視点も教えていただいた。

記念講演

秋田喜代美氏／東京大学大学院教授

「ねがいから始まる科学する心 京都市立中京もえぎ幼稚園に学ぶ」を演題に、東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長の秋田喜代美氏による記念講演の講演内容を以下にまとめる。

本園の過去4年間の研究の過程について具体的に丁寧に検証したところ、園の文化を受け継いできた結果が「最優秀園」に結びついた。今年度は子どもの“ねがい”に着目し、また、“ねがい”に着目して図式化したことにより、子どもの行為の意味を具体的に深めた。

“ねがい”は、教師の願いだけではなく子どもの側から考えていったことで、子どもたちがどう感じたか、本当は何をしたかったのか、子どもの奥底にある気づきを探り、本質的に考えていったということが重要である。「できる・している」と「できない・関わっていない」の間にある子どもの心の動き、その子らしさのプロセスを受け止め、見えにくいところを見て支えていこうとする心の機微を感じる。

図を考案するプロセスでは、同僚と苦労をともにしながら自分たちの概念をどうやって表現していくのか探究しメタ化して「これが私たちの園の大事な価値だ」と表明したことに意義がある。また、事例を図式化して整理して比較・検討したことで、単体の事例を読むだけでは分からなかった新たな気づきも生まれた。

乳幼児期に一番大事にしたいのは、「気づく」ことである。子どもたちが「気づく」ということは課題発見であり、これからの時代に必要なことは課題生成し、自分で検証してみる余地があることである。その際に本園の論文のように教師が「なんでやろう」と子どもと共に沿い、共感するという立ち位置があることが大事である。

また、本園では、研究発表会に先立って、保育者たちが研究の過程について語った動画が配信した。その動画を見た方から、「出演した先生たちの眼差しや頷きあう姿から同僚性を感じた」との意見があった。保育者同士が「ワイガヤ」をして WHY を語ることで、価値観、本質を語り合う。その際に眼差しの共有や動作の共有をすることで、発話内容の質が上がる。日本では、従来から相手の文脈の中に入り直観して共に進めていくことが特徴で、本園でも保育者が子どもや同僚と共感しあって物語り、保育の質の向上をしている。

子どもの“ねがい”から始まる保育は、私たちの願いを叶える未来を形作るのではないか。

最後に、全国の様々な園がつながって協働的探究の輪としてオンラインで本発表会が実施できたことに感謝を述べられた。